# あるむぜお101

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 101　2012年9月20日

府中市郷土の森博物館内旧河内家住宅にかざったお月見の供物【2011年（平成23）10月】

目次

1-2 年中行事の現在 in 府中
②お月見

3 展示会案内
企画展　家の神さま仏さま

4-5 ノート　「霞ノ関」の伝承
～平将門と東山道武蔵路

6 知る人ぞ知る！　府中ゆかりの人物
⑥由木左衛門景盛

7 最近の発掘調査
相模国のひと武蔵国府のはずれに眠る

8 町にまつわる雑学講座　多磨町

## 年中行事の現在 in 府中

お正月から大晦日まで、日本にはさまざまな年中行事があります。平安時代より続くものもあれば、節分の恵方巻きのように最近になって広く行われるようになったものもあります。そのなかでもふるくから伝承されている府中市域の年中行事の現在について紹介します。

## ②お月見

全国的には、旧暦8月15日の中秋の名月のお月見が知られていますが、満月直前の旧暦9月13日に行う家もあります。府中では、ススキを日付けと同じ13本、三宝にのせた団子も同じ数、その年にとれた柿、栗、芋などの作物を月に供えます。そのほかにお菓子などを供える家もあります。

# 年中行事の現在 in 府中

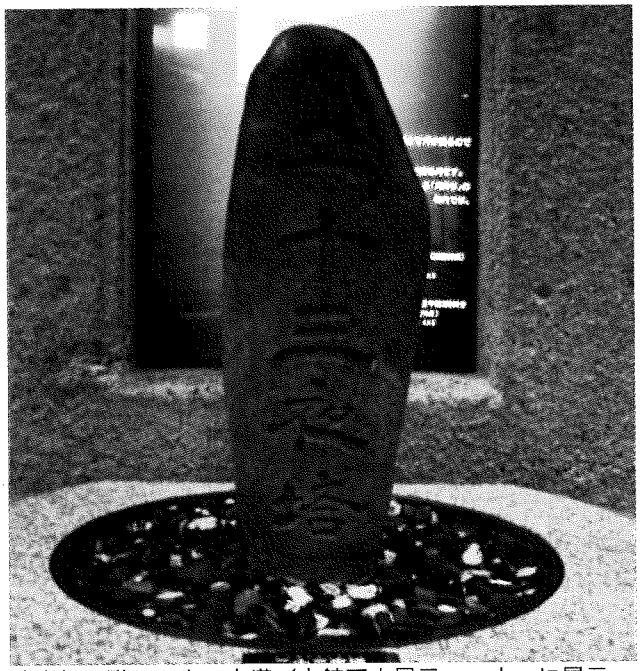
## ②お月見

月は私たちの生活と昔から深く結びついていました。1873年（明治6）に、暦が太陽の動きをもとにした新暦にかわるまで、日本では千年以上、月の動きをもとに考えられた旧暦（太陰暦）を基準に一年をすごしていました。私たちの時間の感覚は、すこし前まで月を軸に動いていたのです。

電灯のない昔、暗い夜を明るく照らしてくれたのは月でした。海の潮の満ち干きにも月が関係しています。月の光が明るすぎる夜の海では、松明やランプなどの光に集まってくる習性を持つ魚が獲りにくいため、「月夜間」といって今でも漁が休みになるところがあります。

30日かけて満ち欠けをくりかえし、その形や明るさを変えていくことも手伝って、月は神聖なものと思われていたようです。日本の各地には月が出てくるのを待つ「月待」など、月にまつわる行事が色々伝わっています。

そうしたかつての風習を語る当館の収蔵資料のひとつに「二十三夜塔」があります。分梅町にかつて立っていたこの塔は、江戸時代、何月かは不明ですが旧暦23日の夜に皆で月見をしたことを記念して建てられたもののようです。二十三夜塔は市内に4基確認されていますが、現在こうした集団で行う月見行事は残っていません。ちなみに二十三夜の月は満月ではなく、半月です。



建立年不詳の二十三夜塔（本館天文展示コーナーに展示中）。市内には四基確認されている。

旧暦の8月15日（2012年は新暦9月30日）は、暦の上でほぼ満月にあたるため、十五夜と呼び「お月見」をします。この日は「中秋（または仲秋）の名月」と呼ばれ、もっとも美しい月を見ることができる、といわれています。また、旧暦の9月13日（2012年は新暦10月27日）は、十五夜の二日前で「十三夜様」と呼びます。この旧暦8月15日か旧暦9月13日のどちらかで、人びとは「お月見」をします。

府中周辺では、ススキを8月は15本、9月は13本とってきて花瓶に立て、机を祭壇にするなどしてかざります。その脇には、お団子や柿、栗、里芋など、秋にとれた作物類を月にお供えします。最近は少なくなりましたが、お供えした物はあとで子どもがもらいました。農家では何かしらの行事があると、そのたびにお団子をつくっていました。お菓子が貴重だった頃のお団子や果物は、格別なものだったようです。

しかしこうした風習は、次第に行われなくなってきました。旧暦が身近なものでなくなったのに加え、電灯で夜の世界が明るくなり、月を見上げる時間が減っていったためでしょう。

郷土の森博物館ではここ数年、旧暦9月の十三夜を中心に復元建物にススキをかざり、栗など館で収穫したものを供え、お月見を再現しています。旧暦9月の十三夜に行うことにしたのは、旧暦8月の十五夜には、当館のススキの穂がまだでていないことと、これまで話を聞いた多くの方が十三夜に行うとしていたためです。これは、中秋の名月頃は田んぼ仕事が忙しかったためかもしれません。

なお、現在では宅地化の影響で、市内でススキが生えている場所は限られてきましたが、生花店で購入することが可能なようです。作物をつくる農家も減少し、お月見自体、ススキや団子などのグッズを購入して実施する行事に変化しつつあるといえるでしょう。

（佐藤智敬）

展示会案内

# 企画展　家の神さま仏さま

正月を迎えた家の神棚。天照大神と大國魂神社のお札、鏡餅、榊、お神酒徳利が供えられている。大鳥神社（大國魂神社境内鎮座）の開運熊手も見える。（1976 年 1 月　宮西町にて撮影）

府中を代表する祭礼として、大國魂神社のくらやみ祭が知られています。非常に盛大で多くの市民が参加しています。そのほか、市内には地域ごとに神社やお寺が数々あり、盛大な祭礼を行っています。それぞれの土地ごとに守り神、守り本尊ともいうべき神さま仏さまがあり、ともに暮らしてきたといえるでしょう。

しかしそうした存在はこれら地域単位のものにとどまりません。村の鎮守や寺院、路傍の石仏や小さな祠だけでなく、多くの人々は家においてもさまざまな神仏とともにすごしてきました。屋内に神棚や屋敷神を設置し、豊年満作や家内安全、諸願成就などを目的とした寺社のお札を掲げ、神仏をまつり供物を供えている家は現在でも少なくありません。単に手を合わせるだけのモノから、幣束を立て、榊やお神酒、供物を供えるもの、神職や僧を招き祭祀してもらうものまで、さまざまな種類のものがあります。なかには、節分の時に門口に取り付ける柊の葉とイワシの頭など、魔除けのまじないもありますが、多くの場合、寺社からお札やお守り、ご神体をいただいてきます。

屋敷神や神棚は、ある時期に家の守り神が鎮座する場所としてつくられました。その中でも市内の家でもっとも多い稲荷様は、2月初午の日を中心に各家でおまつりをします。

## 2012/10/20㊏～2013/4/7㊐

## 会場：本館2階企画展示室

大國魂神社や御嶽神社（青梅市）、成田山新勝寺（千葉県成田市）、川崎大師（神奈川県川崎市）などの有名寺社で発行・授与されるようなお札類の多くは、毎年新年や縁日、満願の日などに新しいものをいただきます。古いものは返却したり、お焚きあげにしたり、どんど焼きに使用するため、多くの場合残りません。しかし、毎年大事にそれらを保管する家があります。また現在はまつっていなくても、先代がかつて寺社からいただいたお札類が、神棚や屋根裏などに大事に保存されていることがあります。こうしたものを通じて、その家での神さま仏さまとのかかわりを知る手がかりが得られます。

展示会では、現役でまつられているものは難しいですが、過去にさまざまな経緯でまつられ、保存され、そして博物館にもたらされた祠、御札類を通して、府中の家々における神さま仏さまについて紹介します。　（佐藤智敬）

NOTE

# 「霞ノ関」の伝承～平将門と東山道武蔵路

小野 一之

「霞ノ関」伝承地（多摩市関戸 熊野神社）

## 「霞ノ関」の伝承

かつて「霞ノ関」と呼ばれた関所のような施設が、多摩川の対岸にありました。武蔵国府のあった府中から関戸橋を渡った少し先で、関戸（多摩市関戸）という古い地名も、これに因んだものと見られます。ゆかりの場所とされるのが、鎌倉街道の旧道に面した熊野神社付近で、かつて木柱の柵列が発掘されたこともあり、東京都指定の史跡になっています。

「心あてにそれかとぞ見る桜花 霞の関の春の夕暮れ」（光経集）などと歌われ、「霞ノ関」は和歌の名所、すなわち歌枕にもなりました。それは、古代に相模・武蔵・上野の国府を結ぶ官道（東山道武蔵路）が通じ、国司を始め多くの都の官人がそこを旅したからです。中世には鎌倉から武蔵国府・上野・信濃方面へ向かう鎌倉街道上道が同じ場所を通りました。武蔵国府に接し、主要な道と多摩川が交わる要衝だったからこそ、関所が設けられたのでしょうが、いつ何のために置かれたのか記録がなく、実態も全くわかっていません。

そうしたなかで、ひとつ鎌倉時代末期に成立した『曽我物語』（真名本）に、次のような貴重な伝承が記されています。「彼の西行法師が東下りの時、朱雀院の御時、将門将軍此の処に関戸を立てられたりしかば、俵藤太秀郷が霞の関と名付けて、打破りし昔の事を思い出でたりけるにや」。建久4年（1193）、鎌倉幕府を開いて間もない源頼朝が関戸に宿泊した時、「東下り」の西行がここを歩いたことや、平将門がこの関を設け、藤原秀郷がこれを「霞ノ関」と名付けて将門を破った歴史のことに思いを馳せたというのです。

## 将門と関

頼朝の時代よりも250年程前、将門は国家に対する反乱を企てました。『曽我物語』の伝承の意味するところは、将門が関を立て、秀郷がこれを有名無実なもの（霞の言葉からの連想）として将門を滅ぼしたということでしょうか。「将門の乱」の経過については『将門記』を始め少なからず史料がありますが、「霞ノ関」のことは他に出てきません。

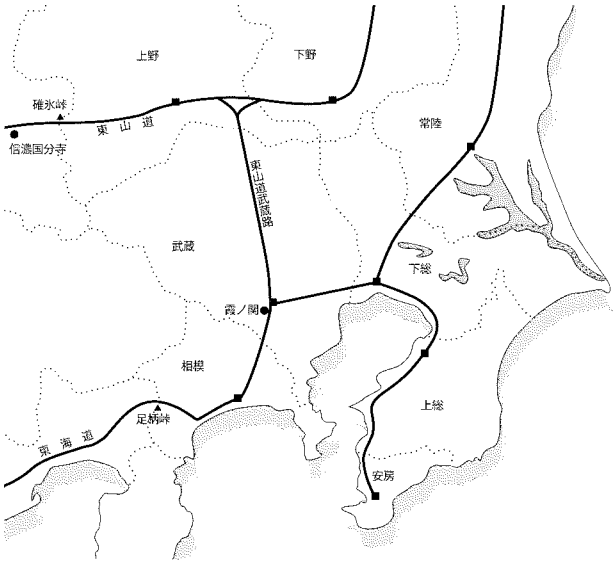
ただ、天慶2年（939）に坂東諸国の国府を制圧し、上野国府（群馬県前橋市）において「新

皇」を宣言した将門は、これを諌める弟将平に対して「凡そ八国を領せむの程に、一朝の軍攻め来らば足柄・碓氷の二関を固め当に坂東を禦がむ」と豪語したといいます。朝廷軍が攻め込んできたら、碓氷峠（群馬県安中市）と足柄峠（神奈川県南足柄市）の関で防衛すればいい。『将門記』に載る将門のそのような言葉のなかにあった関の印象が強く、また、将門が深く関わった武蔵国府に近い「霞ノ関」とその名前からの連想で、こうした伝承が後になって作られたのではないでしょうか。

### 東山道武蔵路の役割

「霞ノ関」の将門伝承の背景には、もう一つ、当時の東山道武蔵路の役割も関係しているように思います。東山道武蔵路は、律令国家成立当初、東山道に属していた武蔵国に上野国から向かう連絡路として設けられた道のことです。幅12メートルの直線道で7世紀後半に造られたことが発掘調査で明らかにされました。

宝亀2年（771）に交通不便を理由に武蔵国が




東山道武蔵路関係図

東海道に移管されてからは、東山道武蔵路は公式ルートでなくなりますが、その後も頻繁に使われていたことが多くの史料によって確かめられています。都から東国・東北地方へ向かうには、東海道から東山道武蔵路を経由して東山道に入るルートが一般的に使われたことを最近の研究が明らかにしています。

そうしたなか、「将門の乱」の前提となるような治安悪化の事件が坂東各地で起きるようになります。昌泰2年（899）の上野国からの報告は、強盗が蜂起し碓氷峠と足柄峠方面に逃亡したため関を設けたこと、武蔵国で「富豪の輩」「傔馬の党」（運送業者）が略奪行為をしながら東山道と東海道の間を行き来していることを述べています。地理的な位置関係から、東山道（碓氷峠）と東海道（足柄峠）を結ぶ東山道武蔵路が事件の主要な舞台になっていることは明らかです。

### 東国の幹線道

実は将門の動きについても、こうした東山道武蔵路と深く関わっていると思います。天慶元年（938）、一族の平貞盛と対立抗争していた将門は、朝廷に訴えようと上京する貞盛を追いかけました。信濃国分寺付近（長野県上田市）で合戦をするのですが、かわされた将門はやむなく引き返しました。同じ頃、武蔵国府での国司・郡司らの紛争を聞いた将門は、今度は武蔵国に向かいました。結局この調停には失敗し、逆に乱を起こす引き金にもなってしまうのですが、こうした将門の行動や情報のルートに、東山道と東山道武蔵路が使われていることは明らかです。その翌年、将門は常陸から下野へ、さらに上野へと東山道ルートを西に進みながら各地の国府を制圧した後、上野国府では碓氷・足柄の関の防衛を想定しています。将門の新しい王権構想のなかにおいても、東山道武蔵路の重要性が意識されていたことは間違いないでしょう。

「霞ノ関」を将門が立てたとする伝承の信憑性は、残念ながら低いようです。しかしながら、東国を混乱させ朝廷を驚愕に陥れた「平将門の乱」に関わるこの伝承は、東山道武蔵路と多摩川の交点に位置し、国府の前面にもあたり、抜ければ東海道さらに京都へとつながるこの地点の歴史的な重要性をよく物語っているように思います。それは、東山道武蔵路から鎌倉街道上道に替わっても、時代を越えて「東国の幹線道」としての機能を持ち続けたことからも窺えるでしょう。多摩川をはさんで国府のあった府中と関のあった関戸はその要の位置にあったのです。道行く人はそれを忘れてくれるな。平安時代末の著名な歌人・慈円の次の歌は、そんなことを今に訴えているようにも聞こえます。「呼子鳥 霞の関に声すなり 過ぎ行く人を立ちどまれとや」（拾玉集）。

# 知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物

## ⑥ 由木左衛門景盛

「今年の彼岸も父祖の地では私は祀ってもらえなかった」と今回の主人公は冥土で嘆いているかもしれません。何故ならこれまで彼と府中を結び付けて語られる事は稀だったからです。

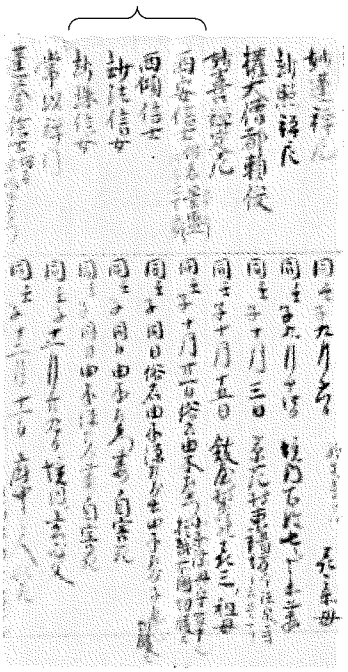
由木左衛門景盛は、戦国時代末期、小田原北条氏の一族で支城の八王子城主だった北条氏照が、まだ滝山城に居た時代からその配下にあったと思われる人物です。後北条氏の関係文書を集めた史料集の中に由木氏の名もいくつか見られます。しかし、由木左衛門景盛がフルネームで登場するのは、天正6年（1578）3月17日付で、高野山の龍光院に刀を添えて両親の供養のための位牌と回向料を納めたという1点だけです。（『戦国遺文 後北条氏編』No.4726）

この人と府中を関係付けるのは、あきる野市五日市にある古刹大悲願寺に残る過去帳です（『福生市史資料編 中世・寺社』所載）。と言っても景盛自身の項には写真のように府中を窺わせる記載はありません。しかし、彼を軸にして系図を作ってみると府中と由木氏との繋がりが見えてきます。

まず確実なところでは、景盛の母である女性は由木隼人の妻で府中高橋氏の女とあります。高橋姓は他にも散見されますが、江戸時代に府中宿本陣役や府中本町の名主を勤める家です。

興真信士の戒名を持つ由木隼人は天正6年2月25日が亡日とあり、先の景盛が高野山に回向を依頼した日時と符合するので彼の父と考えられます。しかしもう一人、天正10年9月に亡くなった由木加賀守という人物にも「府中之由木左衛門ノ亡父」と註されています。二人の父が現れる実態は不明です。或はこの左衛門は景盛と別人なのでしょうか。

さらにもう一人、隼人の実父とある由木加賀守は元亀3年（1572）に亡くなり府中の花蔵院に葬られたと書いてあります。花蔵院は府中市宮西町に現在もある寺院ですが、由木氏との関係は伝わっていませんでした。



過去帳のうち由木景盛と家族の項
写真提供：福生市郷土資料室

このような史料の常として、多くの記載の中には矛盾したり、考えあぐねる記述もありますが、景盛が府中に濃い血縁を持つことは確実でしょう。由木氏の根拠地は地名からみて漠然と八王子の柚木と考えられていますが、一族が府中にいた事は間違いありません。

この過去帳は、戦国時代末から江戸初期に40年にわたって当寺の住持であった海誉が起筆し、後に如環という僧が江戸時代中頃に整理したものです。海誉の両親は景盛の姉か妹と由木豊前守です。さらには徳川家康に重用された有名な増上寺の観智国師源誉もまた、由木豊前守に連なる血筋でした。

この過去帳には「八王子討死」「小田原ニテ討死」と後北条氏と命運を共にした人たちが沢山あがっていますが、府中関係者として由木、高橋、鹿島田、馬場などの姓が拾えます。戦国時代の府中については極めて史料が少なく、府中に残る江戸時代の史料からは、由木氏の動向も全く見えなくなりますが、彼らは中世と近世の府中を結ぶミッシングリングになるでしょう。

さて景盛の最期ですが、過去帳には慶長17年（1612）10月21日に越前国で切腹したとあります。彼は豊臣軍による後北条氏攻略を生き延び、家康の二男で北庄（のち福井）藩主になった結城秀康に仕えました。しかし秀康の没後、久世騒動と呼ばれる重臣たちによる御家騒動に巻き込まれ、息子・妻・嫁共々故郷を遠く離れた地で自害して果てたのです。（馬場治子）

最近の発掘調査

# 相模国のひと 武蔵国府のはずれに眠る

本宿町二丁目　府中市ふるさと文化財課　荒井　健治

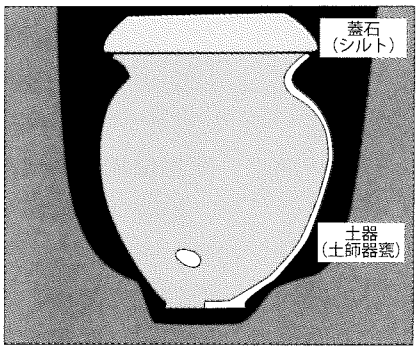
今回は、本宿町の国道20号線と、旧甲州街道が交わる付近で見つかった、古代のお墓のお話です。

見つかったお墓は、火葬した骨を土師器の甕に収め、石製の蓋をして埋葬したものです。武蔵国府内では、火葬した骨を土師器の甕に収め埋葬する例は、これまでにもいくつか見つかっています。これらは、武蔵国府付近で煮炊きに使われている、武蔵型と呼ばれる土師器の甕を骨壺に用いるものです。しかし、今回見つかったものは、相模国で作られたと考えられる相模型甕を骨壺に用い、軟質の石を加工して蓋にしている点で、これまでに見つかったことがないタイプのお墓といえます。

お墓が見つかったときは、写真のように甕の破片と角礫と焼骨片が混じったような状態でしたが、角礫と焼骨を除くと、底の方は甕下半が元の状態で残っており、そこに甕上半が崩れ落ちていたことが分かりました。また角礫は、軟質の石が割れたもので、接合・復元により、甕の口ぐらいの大きさの円盤状で、蓋として用いられたものでした。土師器の甕は、本来煮炊きの道具ですが、骨壺として用いる際は、煮炊きに使っていない新しいものが用いられています。

今回見つかった相模型甕が、どのような経緯で武蔵国府近くまで運ばれてきて、骨壺に使われることになったかは定かでありません。ただ相模型甕は、商品として武蔵国府近くまで流通しているような性格のものでないことから、骨壺として用いるための新しい甕を準備する場合、武蔵国府近くでも作られている武蔵型甕に比べ、入手はかなり難しかったと考えられます。それにも関わらず、相模型甕を入手し、甕に合わせた蓋を作っていることからすると、葬儀のために周到な準備が行われたと考えられます。おそらく埋葬された人物は、相模国出身者ないし、相模にゆかりが深い、それなりの地位の人物であることが想像されます。

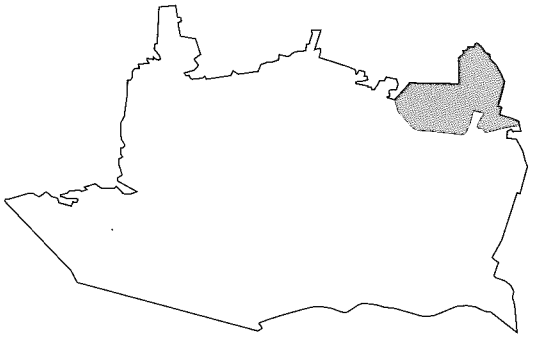
このようなお墓が、国府のマチからやや離れた本宿町になぜ造られたのか。この謎は、今後解明しなければならない問題です。




火葬墓復元模式図

# 町にまつわる雑学講座 ～多磨町～

府中市は、1954年（昭和29）に、府中町、西府村、多磨村の1町2村が合併して誕生しました。面積29.34平方キロメートルの中には38の町があります。本シリーズでは、その中からいくつかの町に関する雑学を掲載します。



東京都の23区と島嶼部を除いた範囲を「多摩地区」もしくは「三多摩地区」と呼びます。東京都の大部分は、かつて武蔵国の多摩郡に属していました。多摩郡は1878年（明治11）東西南北の四つに分割され、東多摩郡（現在の中野区、杉並区）以外は神奈川県に属していました。府中市域が属していたのは北多摩郡で、1893年（明治26）に北多摩郡の大半が東京府に移管されるまで神奈川県でした。西多摩郡、南多摩郡、北多摩郡からなる多摩三郡域はその後再合併や分離が行われますが、ほとんどが東京都下に移ります。そのため23区に全体が編入された東多摩郡を除く三郡が大部分を占める地域という意味で「三多摩」と呼ばれています。現在でも郡名が残るのは奥多摩町、檜原村、瑞穂町、日の出町の四町村を擁する西多摩郡のみですが、合併で市となり郡名がなくなっても、三多摩という呼び名は残っているのです。

さて、京王線の駅に「多磨霊園」（かつては「多磨」）、西武多摩川線にも「多磨」（かつては「多磨墓地前」）があり、同線の白糸台駅はかつて「北多磨」駅でした。いずれも「磨」の字を使用しています。府中市は1954年（昭和29）に、府中町、西府村、「多磨村」が合併して誕生しました。こちらも「磨」の字を使用しています。これは1889年（明治22）、町村制施行により8か村が合併し、「タマ村」となるのと同時期に、南多摩郡にも「タマ村」が誕生することになり、自治体の混同を避けるため北多摩郡のタマ村は「多磨村」、南多摩のタマ村は「多摩村」（現在の多摩市）と表記するようになったためです。多くの著名人が眠ることでも知られ、1923年（大正12）に開設された多磨霊園（当時は多磨墓地）が「多磨」の字であるのは、多磨村内の墓地という意味からでした。

「タマ」にはほかにも「玉」「多麻」などさまざまな字があてられ、正解の表記があるわけではありません。現在では地域全体の呼称として「多摩」と表記することが多くなりましたが、府中市域ではこうした理由により他地域には少ない「多磨」の表記が残っているのです。

府中市が誕生することにより、多磨村は消滅しましたが、合併から10年後の1964年（昭和39）、町名地番の改正に伴い「旧多磨村内であり、区域の大半が多磨霊園である」という理由で誕生したのが現在の多磨町です。それまでこの辺は押立山谷と呼ばれ、江戸時代には押立村の一部でした。そのため、表記こそ異なりますが、多磨町の鎮守はかつての地名を彷彿とさせる「三谷神社」といいます。

このように見ていくと、「多磨町」は比較的新しいものでありながら、古来から使用されてきた「多磨」の字を使用し、旧村名にちなむだけでなく、「タマ」そして府中市そのものの歴史を考えさせてくれる町名だといえるのではないでしょうか。

（佐藤智敬）

芸術家岡本太郎氏の墓所（多磨霊園）


府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.101 発行日 2012/9/20
編集・発行 公益財団法人府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町 6-32 TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/